

山梨県内の企業三社が、竹炭を製造する炭化炉と、竹炭を燃料にするボイラーを開発した。竹林が拡大して山林を侵食する被害が全国的に問題になる中、竹を資源化する取り組み。間伐促進や化石燃料の消費削減につながることで期待される。



開発した竹炭を製造する炭化炉。プラントを2基併設している

# 竹炭製造炉、ボイラー開発

## 県内3社 間伐促進、CO<sub>2</sub>削減も

事業の中心企業は疾測量（甲斐市篠原）で、連携するのは富士冷暖（甲府市上石田三丁目）と柳川芳鉄工所（昭和町築地新居）。疾測量が販路開拓や事業運営、富士冷暖が装置の開発や設置、柳川芳鉄工所が製造を担当する。九州工業大が技術面、山梨中銀リースが資金面で支援する。

疾測量によると、外国産タケノコの輸入拡大などによって放置される竹林は年々拡大し、被害は山梨を含む全国で問題化。竹林化が進めば、森林が二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）を吸収して地球温暖化を防ぐ機能や水土保全機能が低下するとい

う。開発した炭化炉は、高さ二・二メートル、直径一・三メートルの円柱形。

チップ状にした竹を入れ、プロパンガスなどを使って熱風を五分間程度送り込み、内部を七〇―八〇度に保って二十時間かけて自己発熱で熱分解させ、炭化させる。竹炭の製造量は二十時間で三百六十キログラム。炭化方法は特許を取得している。

特徴は①小型で移動設置が可能②ランニングコストが安い③タイオキシシンや排ガスに

酢液は、害虫駆除や化粧品に使う。

よる環境汚染の心配がない。事業のモデルケースとしては、森林組合や市町村に炭化炉をリースや販売。できた竹炭は温泉組合などに販売し、専用ボイラーで使ってもら

る。疾測量の石井猛雄会長は「竹林の間伐促進や環境保全などメリツトがたくさんある新たな事業。全国展開したい」と話している。

山梨日日新聞  
平成21年3月5日付